

モノから考える戦前戦後のローカル放送史

～JOBKによるラジオ塔建設の試みを中心に～

丸山友美¹

¹福山大学 人間文化学部

要約

本研究は、戦前戦後を通じて大阪放送局(以下 BK)で形成される「上方」放送文化の展開を放送と聴衆を結びつけた「ラジオ塔」というモノから明らかにすることを目的にもつ。ここでは、放送内容にほとんど関わらない計画部/総務部企画課の足跡からラジオ塔建設とその展開過程を報告する。

目 的

本研究は、戦前戦後を通じて大阪放送局(以下 BK)で形成される「上方」放送文化の展開を、放送と聴衆を結びつけた「ラジオ塔」というモノから明らかにすることを目的にもつ。NHK や民放各局は、『放送史』や社史を編纂する際、名物プロデューサーやディレクターの功績を放送の歴史として記述してきた。けれど、放送の歴史はこうした「英雄」ばかりだけでなく、放送内容にほとんど関与することのない技術部門や事業部門といった<放送人>によっても形成されていた。

貴基金の助成を受け実施した 2017-18 年度の調査にて、戦前の BK 計画部がラジオ普及のために設置した関西に残るラジオ塔を探して立地やその構造を把握すると共に、放送博物館に保存される『事業成績報告書』や『聴取者統計要覧』を閲覧することで、放送内容に直接関わらない<放送人>の存在が見えてきた。2021 年度は、これまでの成果を踏まえ次項で述べる点に留意して研究を行う。

方 法

本研究は、上述の研究をすすめる重点作業として、資料収集と現存するラジオ塔の現地調査を実施する。具体的な作業は、それぞれ 3 つのテーマを掲げて進める計画である。

■ 第一のテーマ「紙史料の収集・整理」：(4 月-8 月)

2015 年から現在まで、申請者は、大阪の府立中央図書館や国際児童文学館、東京の国立国会図書館や法政大学図書館、放送博物館や放送文化研究所の協力のもと資料を渉猟した結果、これまで言及されてこなかった一次資料を発見することができた。また、その過程で発見した人事異動関連の資料を読み込みから、「上方」放送文化の回路は放送番組やその内容においてだけでなく、それを聴衆に送り届けようと尽力した技術部門や事業部門の<放送人>によって開かれていたことに気がついた。ラジオ塔はその一つのアイデアである。引き続き、東京大阪において一次資料を調査・収集し、ラジオが人々の生活に入り込む過程で「ラジオ塔」が果たした役割を考える。

■ 第二のテーマ「ラジオ塔フィールドワーク」：(7 月-11 月)

2019 年 3 月、1995 年刊『こちら JOBK』(BK70 年誌)の編集メンバーである大塚融氏と面談し、ラジオ塔に詳しい「Q ねっと関西」理事長を務める吉井正彦氏をご紹介いただいた。吉井氏は、2007 年～2010 年に国立民族学博物館の客員教授としてラジオ塔を調査研究した経歴をもつ。2021 年度は、吉井氏をはじめとするラジオ塔研究家の協力を仰ぎながら関西(京都)と甲信越(長野・新潟)でフィールドワークをおこなう。またラジオ塔に関する資料の多くは、現在、吉井氏が管理されている。この資料調査にも取り組む。本研究は、こうした作業とラジオ塔分析との比較を通じて、労働と技術によって人々を区分する文化

放送文化基金『報告書』

的に空間を編成するやり方に着目し、「放送史」や「BK 社史」にほとんど記述されてこなかった放送内容に直接関わらない〈放送人〉を浮上させる。

■ 第三のテーマ「ラジオ塔の分析」：(11月-2021年3月)

これまでに渉猟した広報誌や局内誌そして人事異動にかんする資料から、ラジオ塔は、草創期の社団法人日本放送協会が頭を悩ませていた「聴取者加入廃止率」の抑制対策として考案された施策であることを確認した。BK 計画部(1928年に総務部企画課に改称)は、人々に対し「ラジオと共にある生活」を喧伝するため活動していた部署である。ラジオ塔は、そうした計画部が企画・実行した聴取者調査、ラジオ商を巻き込んだ加入窓口の増設、新聞『JOBK ガイド』(1929年に『JOBK ニュース』へ改題)の発行といった施策のなかの一つだった。フィールドワークから確認したラジオ塔の全国分布地図の作成やラジオ塔の建築様式を分析し、本研究の完成を目指す。

結 果

具体的な作業は、前期・中期・後期に分けて上述した3つのテーマに取り組む予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症が拡大の一途をたどり、関東圏や関西圏への移動や調査を思うように実施できない状況が続いた。そのため、活動範囲を横浜に絞り、以下のような内容に変更して実施した。

■ 第一のテーマ「紙史料の収集・整理」：(4月-7月)

2021年4月～7月の期間は、吉井氏と定期的に連絡を取り合うことで、3つのラジオ塔にかんする論文を入手できただけでなく、大阪公文書館が所蔵するラジオ塔にかんする新資料の所在を確認できた。また、大阪中央放送局で資料収集・整備業務に携わった清水直人氏に報告者のラジオ塔論文に関し意見を仰いだ。

ラジオ塔に関する論文の一つ目は、2014年に刊行された『沖縄県立芸術大学紀要』22号に収録されている三島わかな「戦前期沖縄でのラジオ放送——受信・聴取・発信をめぐって」である。三島は、沖縄に初めてラジオ塔が設置されたのは、沖縄放送局の開局準備にともなう試験放送期間の1941年12月だったと指摘する。県内に設置されたラジオ塔の多くが、「人々が集い、行き交う場所である点が共通し」ており、「とりわけ公園内の設置が多」かったという(三島 2014:9)。その理由について三島は「公園はラジオ体操をおこなうにふさわしい場所だからだろう」と推察する(三島 2014:9)。二つ目は、2021年3月に刊行された『応用社会学研究』63号に収録されている井川充雄「台湾におけるラジオ塔——日本統治下の台湾におけるラジオの共同聴取」という論文である。井川は、国内のラジオ塔を「聴取契約者を増やそうとするための放送局側の広報戦略の一環」とする一方、日本が占領した各地域で建設されたラジオ塔については、「国内のように聴取契約を増やすための放送局の広報媒体というよりは、日本側の宣伝・宣撫工作の一翼を担っていたもの」(井川 2021:19-20)と位置付ける。井川の考察から窺い知れるのは、台湾におけるラジオ塔ではBKが考案したような「ローカル性」を失って、むしろラジオを「ナショナル・メディア」として積極的に受容／消費させようとする思惑である。三つ目は、2021年3月に刊行された『放送研究と調査』71巻3号に収録されている村上聖一「『南方放送史』再考①～大東亜共栄圏構想と放送体制の整備～」である。この論考には、マレー、ジャワ、スマトラ、セレベス、ボルネオ、フィリピン、ビルマの7都市で、日本軍が主体となりラジオ塔建設を計画していたことが記されている。ラジオ塔の建設主体が日本軍であった点も興味深い。この時期「ラジオ塔などの共同聴取設備を設けて、集団での聴取を推進」したとする指摘は重要である(村上 2021:53)。

以上を踏まえて本研究は、人類学者のマルク・オジェが「場所」と「非-場所」という概念によって世界中からあらゆる差異が平板化され、場所の固有性が失われていく事態を肯定的に捉える考え方を取り入れ、「場所=ローカル」と「非-場所=ナショナル」の関係性を浮かび上がらせる分析視点を設定した。

■ 第二のテーマ「ラジオ塔フィールドワーク」：(8月-2022年2月)

以上の先行研究整理を踏まえ、2021年8月から9月までと2022年2月に横浜市中心図書館と横浜市史料資料室及び神奈川県立図書館での資料調査と野毛山公園ラジオ塔のフィールドワークを行った。1932年2月に日本放送協会が達成した聴取加入者100万突破を記念して、横浜野毛山公園のラジオ塔は1933年11

放送文化基金『報告書』

月に建設された。横浜野毛山公園のラジオ塔については、百瀬敏夫が横浜市史資料室が発行する『市史通信』にて取り上げ、建設の経緯をまとめている。この百瀬の先行研究を手がかりに、1932年に発行された地方紙『横浜貿易新報』の調査を実施して、百瀬が引用した新聞記事及び引用した記事以外のラジオ塔に関する新聞記事を新たに確認・収集した。また、横浜市史資料室が所有する『第31回横浜市統計書昭和11年』から『第33回横浜市統計書昭和13年』を調査し、これと合わせて『昭和6年度第一次聴取者統計要覧』と『昭和7年度聴取者統計要覧』及び昭和8年度～16年度『業務統計要覧』と『昭和21年度業務統計要覧』を確認し、横浜市の年度別聴取加入現在数と100世帯当たりの加入割合の推移を把握した。

なお、近畿大学の人見佐知子が発見した大阪市立公文書館が保管する簿冊「寄附関係書類綴」（配架番号4551）に束ねられている「ラジオ塔寄附収受ノ件」を別件で大阪出張した際に11月に吉井氏と共に12月に単独で確認した。なお他行政が保管する公文書にもラジオ塔に関する資料があると推測し調査した結果、東京都公文書館が保管する「寄附受領の件（品川聖蹟公園ラジオ塔用受信機1個）」及び「寄附受領の件（新井薬師公園設置用ラジオ塔用受信機高声機）」、「寄附受領の件（日比谷公園設置用ラジオ塔及受信機1台）」（請求番号322.G1.02）と「寄附受領の件（ラジオ塔ラジオ塔用受信機高声機）[日比谷公園]《財団法人日本放送協会会長小森七郎》」（請求番号322.B1.06）及び京都府立京都学・歴史館が保管する「円山公園ラジオ塔前掲板設置（許可指令）」（データID0000396371）「円山公園ラジオ塔前野球得点板設置」（データID0000400752）「円山公園ラジオ塔前野球得点板建設」（ID0000400884）を発見し、これを複写請求した。

■ 第三のテーマ「ラジオ塔の分析」：（11月-2021年3月）

第二のテーマで収集することのできた新聞記事及び聴取加入者数の推移を踏まえ、ここでは3つの作業に取り組んだ。一つは、『福山大学人間文化学部紀要』22号に「関東に残るメディア遺構——JOAKの建設したラジオ塔」という紀要論文を投稿したことである。二つは、2022年7月11日から7月15日に開催される *International Association for Media and Communication Research* の2022年大会の歴史部会が募集する個人研究発表に”Media Remains in East Asia: Radio Pagoda built by NHK “というテーマで応募したことである。なお、無事採択され7月に発表予定だ。三つは、飯田豊編著の『テレビの民俗学—一人びとは新しいメディアとどう出会ったのか』（ナカニシヤ出版）に寄稿する論文を執筆したことである。ここでは、2020年度及び2021年度に発表したラジオ塔に関する2つの紀要論文を組み合わせ、加筆・修正した「モノから考えるテレビ以前のメディア民俗学—コンテンツを作らない〈放送人〉が建設したラジオ塔」を提出した。

参考文献

- 1) 三島わかな, 2014, 「戦前期沖縄でのラジオ放送-受信・聴取・発信をめぐって」『沖縄県立芸術大学紀要』22号
- 2) 井川充雄, 2021, 「台湾におけるラジオ塔-日本統治下の台湾におけるラジオの共同聴取」『応用社会学研究』63号
- 3) 村上聖一, 2021, 「南方放送史」再考①-大東亜共栄圏構想と放送体制の整備」『放送研究と調査』71巻3号
- 4) 百瀬敏夫, 2010, 「昭和初期のラジオに関する一、二」横浜市史資料室編『市史通信』8号

成果の発表

- 1) 丸山友美, 2022, 「関東に残るメディア遺構—JOAKの建設の建設したラジオ塔」『福山大学人間文化学部紀要』22号, 15-27. (査読なし)
- 2) T, MARUYAMA, 2022, “Media Remains in East Asia: Radio Pagoda built by NHK” in *International Association Media and Communication Research 2022 Conference*, online. (査読付)
- 3) 丸山友美, 準備中, 「モノから考えるテレビ以前のメディア民俗学—コンテンツを作らない〈放送人〉が建設したラジオ塔」飯田豊編著『テレビの民俗学（仮）』ナカニシヤ出版.

連絡先

JOBKのメディア史研究会ホームページ, <http://jobk-mediahistory.com>

(2022年6月30日提出)